画圖百花鳥

四

[illegible]

卯花や腊出ゆけり郭公

呉丈

七十三

卯花（うのはな）

花ごふん付立にべにすこしの具にて付立葉緑青にすみの汁まじり候第一

杜鵑（ほとゝぎす）

杜宇　子規　子巂　蜀魄
鵜鴂　鶗鴂　鷤鴂　買鏡
時鳥　霍公　別都頓宜壽

嘴墨眼茶墨く候背中うすすみくま淡墨にて腐を付ごふんうきへちうごふん候うす墨にて腐をへごふんもうき風切尾よすふ墨同ド口のうち紅乃ぶし

七十四

雞冠（けいとう）

鶏頭花

花赤い肉色上朱く候あんぢにてつくさ黄いごふんくまごふんにてつくさすくよりとちうろうけ葉えより緑青わりえより墨んど候墨んぢにて第五墨向ろくわり墨のけくろり墨んぢきわくまぢろへし

鴫（しぎ）

嘴うす墨眼うす墨く候合すこどのけ墨のう背中うす墨くま風切尾墨ふちごふんく候むらのくごふんくまうのか墨んぢく候墨んぢつくさ下筋ごふんくま同毛去

七しかさふりけしこや鈴れむ

一九

連雀よ口流うハ落む聖花の花

女羅架
琴松

七十五

連翹（れんげう）

花きわうの具付之藤黄の汁付して
ぼかすべし

瑠璃（るり）　翠雀

背黒く墨にて頭より背中こんじやうにてくま
より風切尾墨にて付之白く法墨にてね
ずみ毛之下腹ごふん腹の毛かきべし

七十六

風蘭（ふうらん）

花ごふん付之志べ合黄土朱緑青付之
枝葉ろくせう付之白緑付之葉の汁
ごふん入べし

啄木鳥（きつつき）　鴷

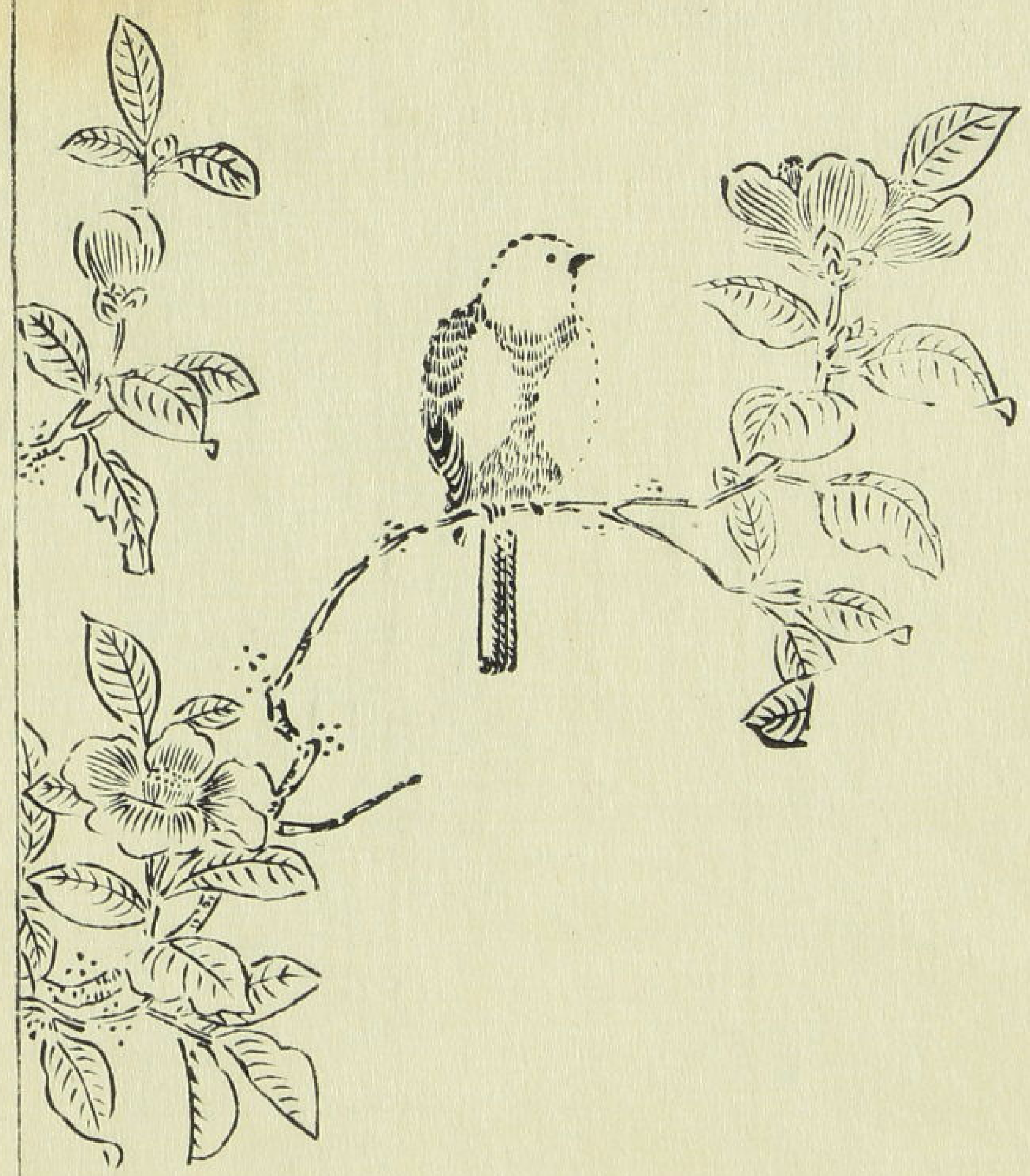
背墨にて腹かしらまでかくまでに赤く朱
のよふなる○目頭くろく又は合黄土朱ずく
毛かき背中法墨にて腹を付うすく
くまごふんにて入目べく毛かきすべし

啄木や寿れ捨ちりや国書請

伴輅

畫工精妙沙羅樹
欲問涅槃真實相
碧鳥好生豈不鮮
堪憐嘴背絕鳴嗽

玉宗千乘



七十七 沙羅雙樹

花はごふんへまごふん筋は志べごふんにて
葉は志ゆうくふうて面白緑にて葉の
汁にて影をつけ候紫緑まて葉の汁にて
く候筋也

碧鳥

背足墨へ淡胴白しごふんへ墨背中
羽先に墨へまたみどりき緑にて合
せ黄土にてくべし

七十八 牽牛花 朝皃

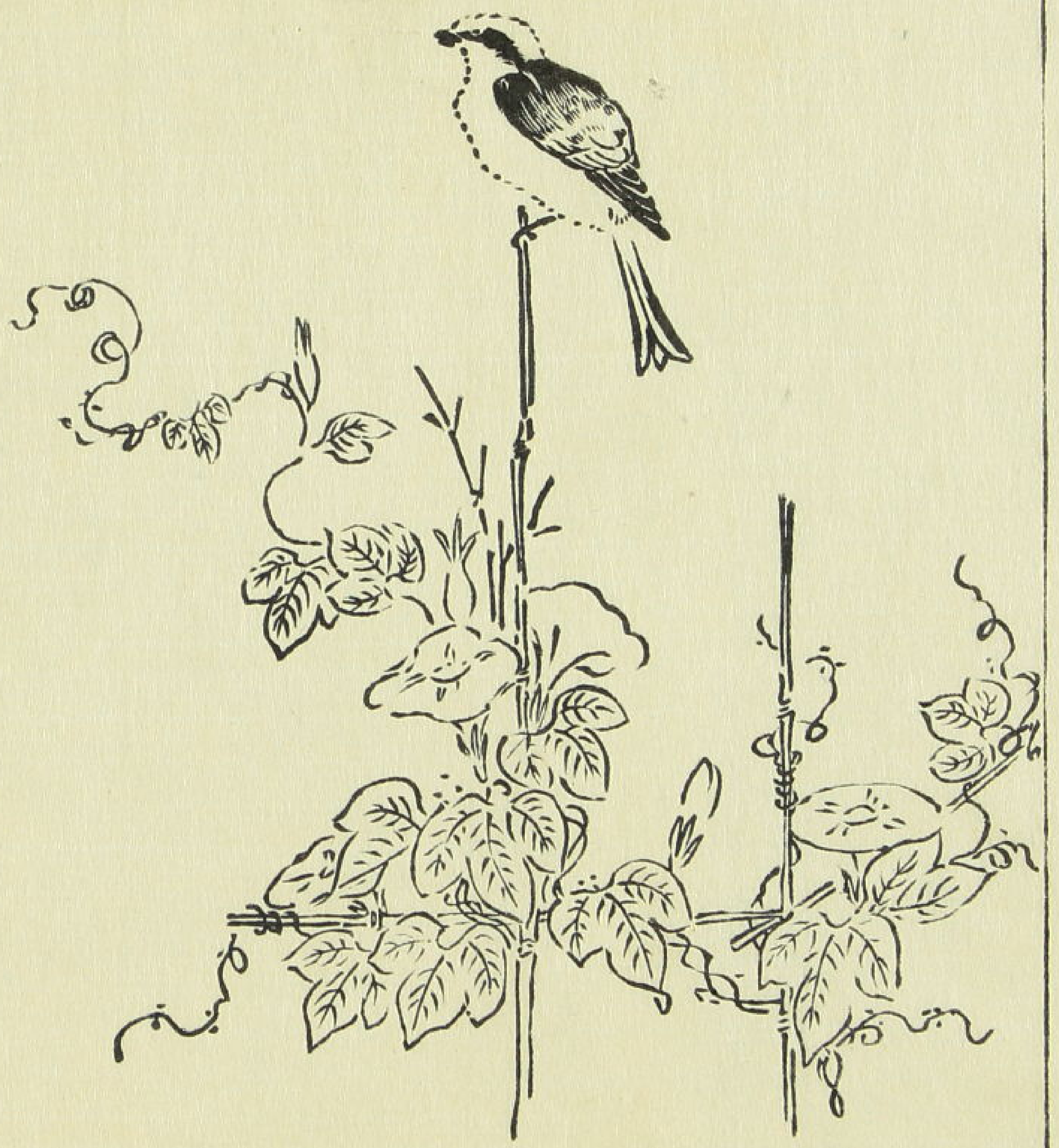
花は地あさぎ淡めにて志べくま上にごふん
ぜうけ中より四方へごふんへま葉緑まて
葉の汁住之夢米むらみつそうき記し

急分の

背足墨へ胡ら羽白しごふんへ胴毛
くさ背中墨へま風切尾先に墨仕立
有りこすねらも墨上に合黄土にてごふん
く候ごふんも去とくべし

日よしろきむやとなりの拵ひき

千雀



ほりしつハ百合小深山の根風ろか

少年 金助

七十九

百合(ゆり)　蘊翟

赤白あり赤ハ花ハ代赭肉色朱にてくまをとん
じつきを付果そしべを付そて白ハを
付る白ハごふんく度を付そてきごふん
にてしべは深緑を付そて白ハを入墨白緑
葉緑青葉の汁仕立

深山頬白(みやまかうじろ)

常に墨ハく度背中まで上ハ朱
むなみ汁鳳仕立尾羽ハ藤黄合黄土
口ばしごふんくまをいれごふん

八十

仙臺萩(せんだいはぎ)

花ハ合藤黄土葉緑青葉の汁にて仕立
枝ハ木枝朱ぬりて入べし

鳥(うそ)

常に墨月の内ハ黒に鼠鉢にて
頭ハすゝき墨をして度一遍ハくべし
下腹ハ臙脂墨にてくまをどりすべし

みやまほゝ白腹に紅河て城下荻　莎鶏

喜ノ鳥ハ常ノ住春　岑水

蒲よりも見よく春の野の紫菜かな

玄詞

八十一

芝蘭（しらん）

花色ハ朱の具に胡粉まぜてくまどりくまを入
仕上べし葉ハ二どん緑青にてくま取をすべし
けし

鶉（うづら）

嘴足ハ墨にて隈取り目の内朱すべし頭より背
うしろ墨くまとりくま入れけすりつけ合羽
其外下毛ハ白くぬりて其上へ風切尾ハ墨
くま毛ハ墨をもつて下毛こふんくま入毛ハ
細き筆にて朱をもつて府を入同毛書くべし

八十二

椿（つばき）

花色ハ朱の具にてくまどり外ぐまをとり
そのうへ入べし花の蘂ハごふんくまを
うすくすべし葉ハごふんにて墨色をとり
そくべしまて白緑葉ハけしくろをん
どくまどりべし葉緑青にて葉のけすりま
くま緑青をとるべし

青鳩（やまばと）

嘴足ハ墨にてくまどり頭より背
其のけくま墨けすりて毛書風切尾墨
くま墨ごふんそそぎてくまごふん縁
書をもつてくま細き墨のけくま同
毛ハさし下毛ごふんくま同毛書くべし
目の内朱にてごふんくますべし

山鳩や椿の花ゝ見え寺

蓮東

母のんのあれ高うも春と告

小寺

菊麿

大名はうつらふしぎり鶉哉

蘭洲

八十三

海棠（かいどう）

花かはふ円白しゑんぐの具ゑんぐく焼円ごふん少しまぜべし多ん二てつゞき多んぐの具多んぐく焼ひきょう色淡くよくわるべしうそうすのけ葉二ぐん緑青草乃汁にて仕立べし

黄鳥（うぐいす）

常ゑんぐの具ゑんぐくの足の具の具朱持たるまうく円毛出羽墨淡くわすぐらぬと上はすき墨をして一遍ぬたき先よりごふんく円毛出とべし尾内ぐく仕立べし

八十四

萩（はぎ）

白はふわり花ゑんぐの具ゑんぐくまごふんその色白いごふんく焼あるまう〇の色葉二ぐん緑青草の汁にて仕立べし

鶉（うずら）

常墨く焼合黄土うくべし此持墨多く焼く上八朱ぐみうくべしそく合黄土うけごふんにて布くく〇色朱ぐみ毛出とべし

かしらや濱りに寝ぬしゆゆの木

來丸

八十五

さんしゆゆの木

花ハ藤黄の具ゑ藤黄にて隈は筋ゑ先にごふん
くまゑ葉合黄土ゑ藤黄にてくまどる

鵥（かしどり）　鵥

背首足とも墨にごふん墨にて隈を実黄男
うすずみにて腹上に朱どりくべし朱墨にて
毛ゑ風切墨にてふちごふんくま黒くこん
ぜうにて隈を付くべしごふんにて入るべし

八十六

木槿（むくげ）　舜英

花ハ藤黄の具ゑ藤黄にて隈白ごふんくまごふん
筋ゑうそにて白緑葉のけく隈葉ろくせう
葉のけりうく隈筋ゑとるべし

きんくら

背首白しごふん足はむ黒墨にて風切
墨仕立掛絆うすずみにて隈とり藤黄
くま付くもゑとるべし

きんしやか咲須傍接木槿垣

郁々

もゝのつくりよむのりんこト

齋貞

八十七

桃(もゝ)

花色んの具上に色んどに胡粉をべどらん白むし
あつまれ具すてらそお墨のけ墨ろくせう
墨のけらふ〇色の色

音呼(いんこ)

惣躰墨同の同墨ぼみ頭白頸く胸墨の汁
毛うさも〇よりあつまで志まうくまちまう
の具にて毛色風切羽墨くさ入合絆白
頸のくまれ仕立尾のきいよ胡さみの毛
あり墨すて仕立べし

八十八

鷹爪(たかのつめ)

花ちよりの具差墨れ汁うてお色んどうゝ〇
こみ具仕るし

山雀(やまがら) 鵖

惣足墨嘴らより合絆うらすくま上に
墨ぼみくる頬より頸すて合粉土くる
風切尾も墨仕立ふらにごらん毛うさご
らんさらひ入其絆毛うさ墨ぼみん

唐韻て山雀野えりとあ孙

擔山

子ら根のかしら八声の目白かな

丘口

八十九

柞（うハ） 文 槲 樸樕 大葉櫟

嘴緑青茶のけまりて候翁共揺より枯て候合黄土之茶ぞみきかひを入べし

繡眼兒（めじろ） 目白

嘴とも黒羽にて目の回来ぞみちちごふんまて明らより背中まで うすまくま上ニ茶のけうすまけ茶れけりても毛ぶとだ下腹でふんく候翁もくもまてく色

九十

木芙蓉（もくふよう）

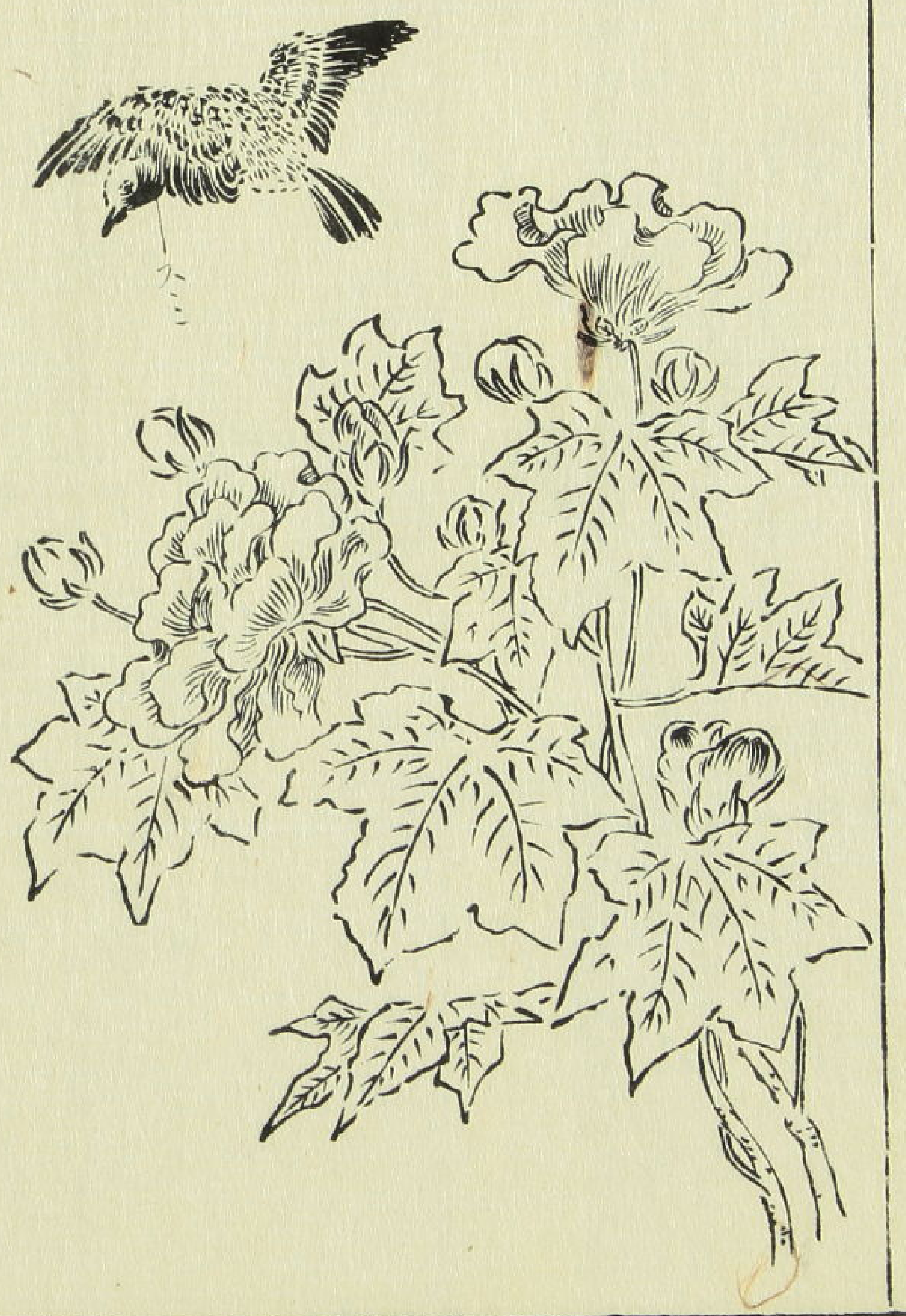
嘴白二色あり花名ぞの具名ぞて候目翁先のの揺よりごふんうとく胴よりつがとうてふ白緑茶のけく候茶緑まく草乃汁くま翁先とべし

鵜（ひさき）

嘴黒羽くんぞうく候共男黒く胸よく茶ぞみけ目毛共風切尾黒にて二字羽ごふんくまの目毛うさ板白しごふんくまの目毛うさし

雨ふりて今日もしほれぬ木芙蓉

加斎



かゝりやる雪のつきゐの羽寝髪

拳石

九十一

刈萱（かるかや）

花も茎も付立 葉墨のけ付立 小草
也入れ合いづれも麁にかく仕立べし

白雲雀（しろひばり）

常雲雀の頭かしらより背中羽まで薄墨にて成
し茶色れけり風切羽墨にて二重ねふちご
ふんそうの也腹毛より後白しごふんにて
腹毛うき朱にてみて麻をのる

九十二

梂（うき）

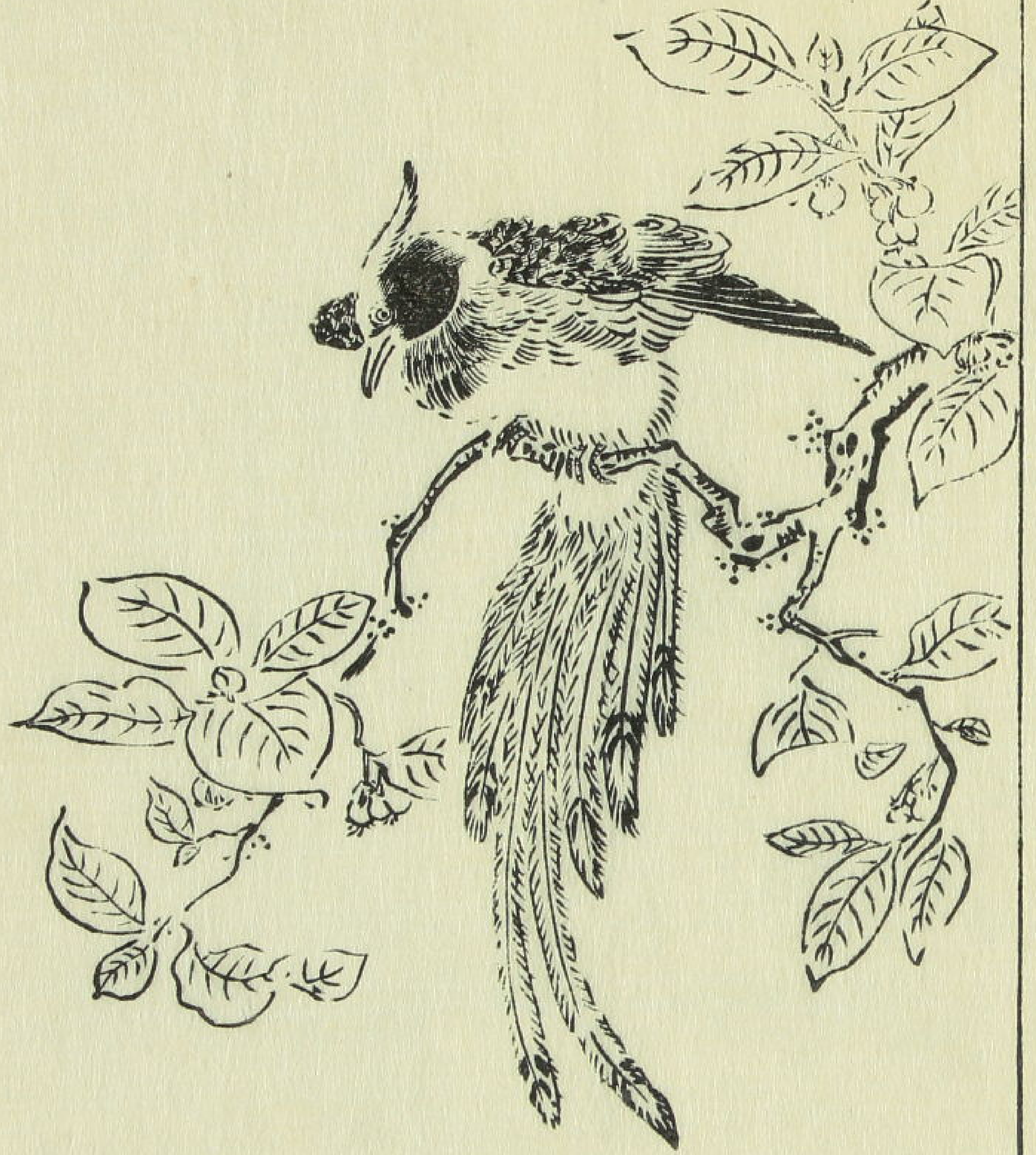
花ごふんにて生えまする白ひと付かへそ
ゑ白緑葉緑まで葉乃けまへる成角
ちとべし

山鵲（さんじやく）

常足赤し肉色上朱にて成羽んげくくつま
いとうきいう白し頬ゟ墨くまにすきと毛りさき
ごふん也皆中羽かいゟ墨にて成上に朱ぢみ
うけ風切羽墨仕立ふちごふんの也とうら合
薄土朱にて淡くさくて毛とごふんにてさ入
尾表ごふん也裏ごふん先は白わりまんげ
の具と墨付にてごくりあいうて毛出もとむ

雨そゝぐ羽音もとまり梢乃風

沾緑



衍覧おもはぬのどより出る深山乃花
千舎

九十三

本綿（きわた） 古終 日本民間所作是也

花をうつして後しべ朱中にて一面ちらしさらへ
ごふん付立うてる白緑葉緑まうけて後
緑青葉の汁にそめとるべし

九十四

藤（ふぢ） 蔓草 黄環

紫白二色あり花ハ地わりにぬりそめずして後
うすぐんじやう 汁墨白緑葉緑を葉の
汁仕立 ○葉合黄土多くして後芯の汁
緑青二だん緑青をもつてあるくべし
蔓朱墨にてくまどり葉ハ汁出ぶくべし

唯紅鳥（のこどう）

嘴足うす墨ぬりてより背中はすそうちて
すゞく後上に朱ぞめにかけ目のまハり一面白き
所ありごふんにまで下あご赤く朱ぬりまぜり
風切尾先墨仕立にそぎごふんにて後羽ぐく
毛がき

燕（つばめ） 鳦

背より背中はうす墨にてくまどり上より墨
まぜ一遍ぐま頬におそ朱をとる○也べしそろ
ごふんに後羽毛がき

燕はきぬしるしよ苗代の房す

蕙洲

あ川ちやうめ橋の朝こほれし

玉牙

九十五

笑靨櫻（ゑくぼさくら）

花ごろん付之本葉のけ付之併ゟうけ
いづれも葉ちようろく仕立へし

猶子鳥（あつとり）　　楽屋　青雀

常に又暑氣中うす宮く陰よんちやを
うくべし風切ゑ尾をくて毛まく来ずみ
しOようを後まで合若ゑうけ下後ごらんくま
同もむ来がらみ府んをむ入へし

九十六

蘭（らん）

花むのの具分むむまひそ葉二だん
うくせう芽乃汁く底分むさくへし

駒鳥（こまどり）

常に是より無待くみす宮だとよに来ゑ宮
の底をうくべしかんのうみす赤く仕立へし
しO合若土下をくくごらんく底同もむとよし

駒とりや風の揺車葉乃包

曼羨

もゝ乃嬰(かげ)ホろ百度将へ日ろ菁地

柳琴

九十七

風車(かざぐるま) 鉄線花

花むらさきにてしべ白くはこんぜうらくせんのいろ
菊のおもてをうすくべにそへてきらく葉をみどりにしつけ
葉こんじやう緑青まぜ葉のすじはそまつにしてよし
仕立なり

川原鶸(かはらひは)

かしら黒く頬毛うすきうすすみ背中に緑こ
あさぎの具黒毛玄風切諸あぶらにてぬら
ごふんと頬尾もはじ目のさくらあいごとくんで
ふんくまく

九十八

さつきまいぞう

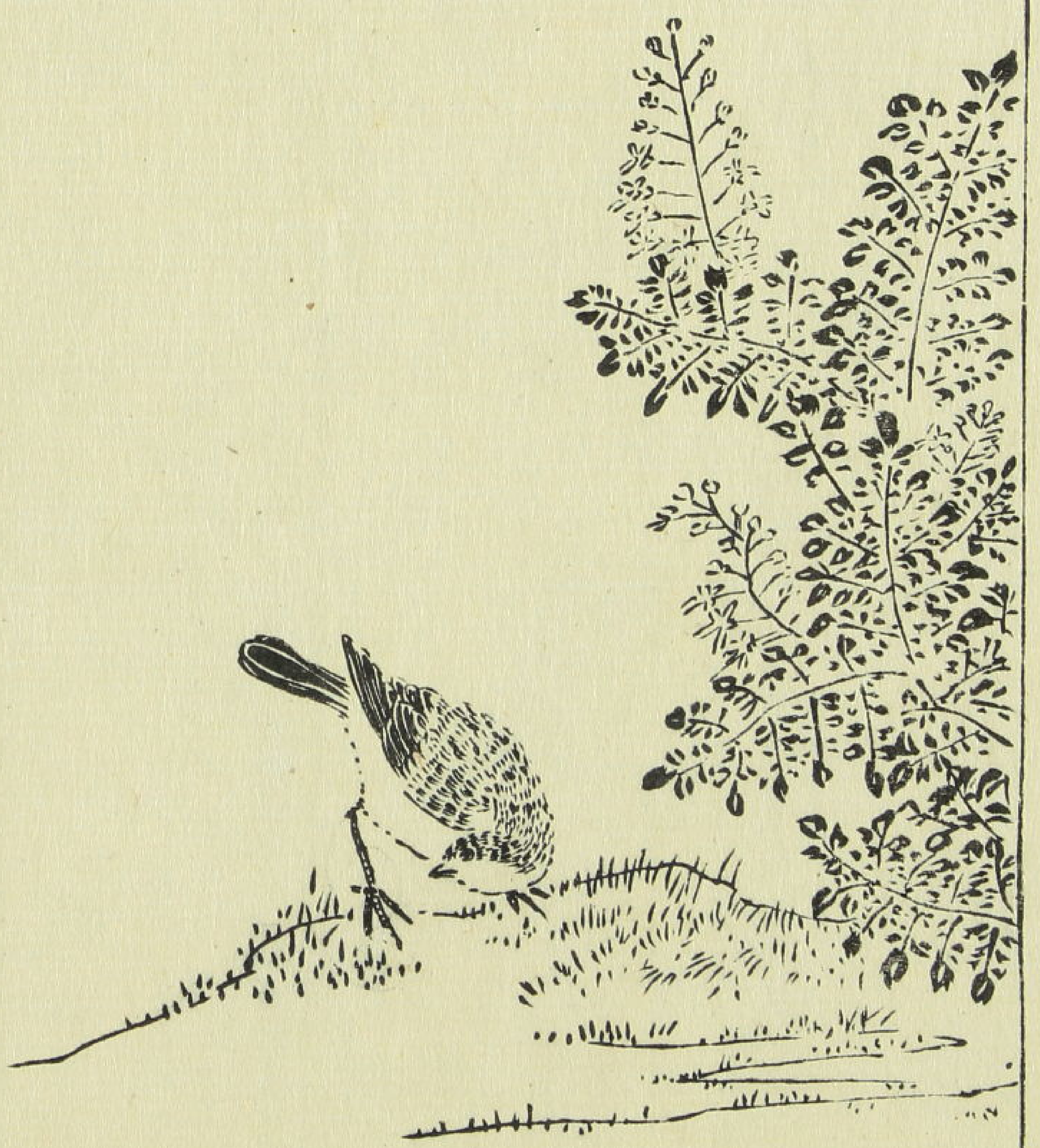
花もくろの具黄緑青いづれも付立葉
ろくせう葉汁に色をかへ付立

鶯(う)くつま

嘴すず黒かしら脊中よりすり黒くまま朱
ずとろけ風切黒背毛玄朱つけてみて

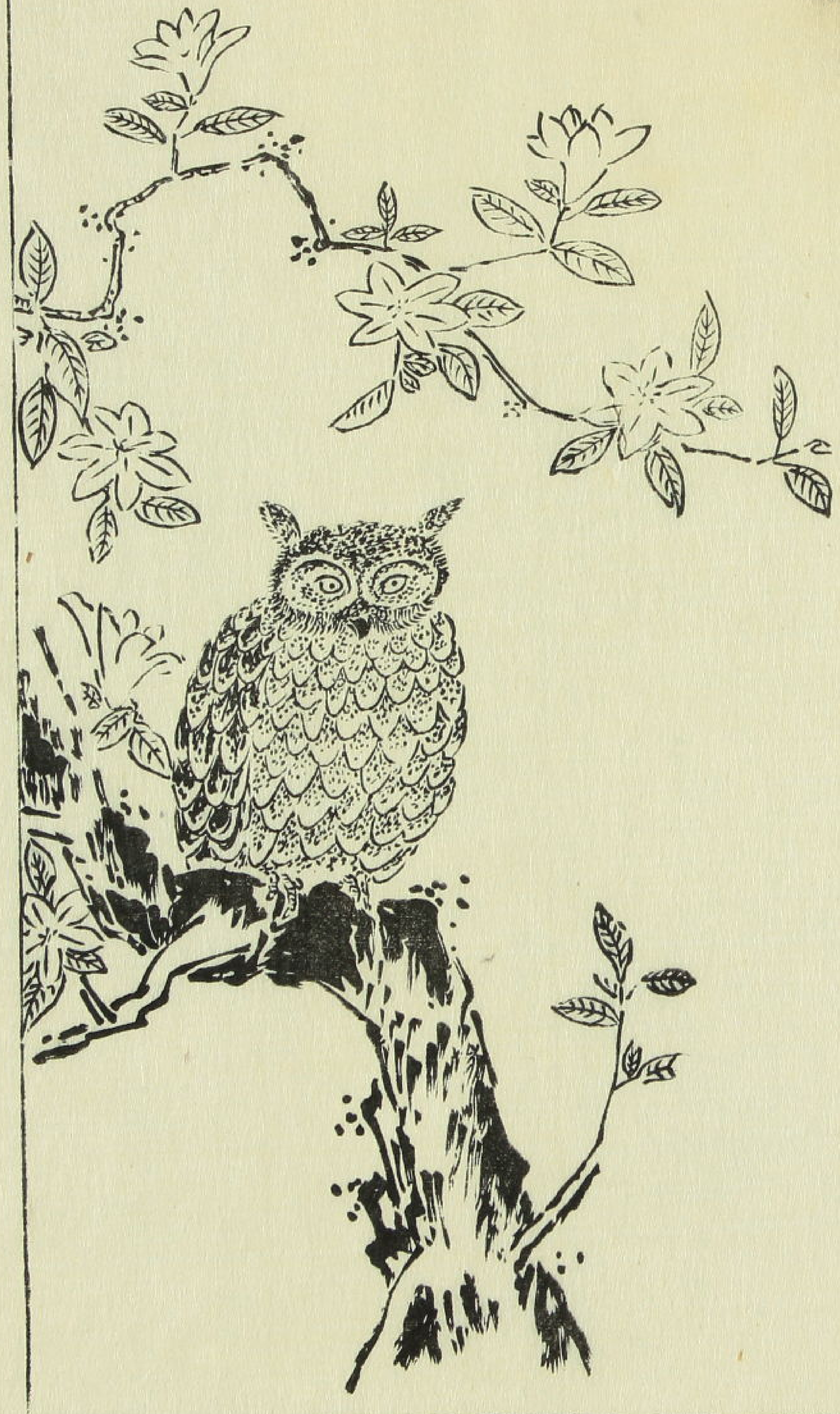
萩の花解りやさはりかやくゝる

野乙



咲くこ姉きしはと木兎の亙圖し

嶺二



九十九

辛夷（こぶし）　杞楝

花ごふんに臙ごふん緑青にて茶の汁葉緑青にうらくま緑青にて茶の汁にて木かきは墨にて上あかるくべし

木兎（みづく）　鵂鶹　角鵄　老兎　逐魂梟

頭より背中墨に羽上に朱どみにて茶のどみ毛出し面より後合黄土にて朱ずみ毛がきごふんにて毛出しとくべし

百

枇杷（びわ）

花ごふんに臙にて茶の汁葉緑青にて葉の汁にてくま緑青とくべし木かき墨にて上あいろにて合黄土のきかひとめべし

鴞（ふくろう）　梟

合黄土にてかわら朱ずみくは目のふち朱ずみくまごふん毛かき地朱ずみにて出分ごふんにて毛出しとくべし足すみくま上に茶の汁くべし

ふくろふは豆をはむかな枇杷法師

白雲